SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

こんにちは、私のお母さん
（你好，李煥英／Hi，Mom）

2021年／中国映画
配給：Tiger Pictures Entertainment、ハーク／128分

2022（令和4）年1月8日鑑賞　大阪ステーションシティシネマ

Data　２０２２－３

監督・脚本：賈玲（ジア・リン）
出演：賈玲（ジア・リン）／劉佳（リウ・ジア）／張小斐（チャン・シャオフェイ）／沈騰（シェン・トン）／陳赫（チェン・フー）

みどころ

中国では『戦狼２　ウルフ・オブ・ウォー２』（１７年）を超えて、『長津湖』（２１年）が興行収入歴代トップとなる、１，０００億円を突破！しかして、９４０億円の歴代第２位が本作だ。「これぞ中国映画！」の典型ともいえる、心温まる母子の感動作に注目！

「世界最高の興行収入を獲得した女性監督」の称号を手にしたのは、中年のお笑い芸人（？）、賈玲（ジア・リン）。２００１年から１９８１年へのタイムスリップは、自らの体験に基づき、“あの時にできなかった母親孝行”をするためだが、なぜ本作は爆発的大ヒットをしたの？それは、あなた自身の目でしっかりと！

涙、涙また涙の自分を再発見できれば、新たな人生観が生まれるかも？

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

在中国，『长津湖』的票房收入超过『战狼 2 』达到历史最高，突破 1000 亿日元 !但是历代第 2 位就是票房收入 940 亿日元的本作品。大家关注可以叫做「这就是中国电影!」的典型，温暖的母子的感动作品！

获得「世界最高票房收入的女导演称号」的是中年戏剧演员(?)，賈林。从 2001 年到 1981 年的穿越时空是以自己的亲身体验为基础，为了当时未能实现的母亲孝顺，但是为什么这部作品大获成功？用你自己的眼睛看看吧！

眼泪、眼泪如果能过重新发现眼泪的我，也许会创造出新的人生观？

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■女芸人出身（？）の女性監督・賈玲に注目！■□■

私が本作を鑑賞した１月８日の翌日、２０２２年２月から開催される、北京冬季五輪の開会式と閉会式の総合監督が、２０１８年の北京夏季五輪に続いて、張芸謀に決定したことが報じられた。それはそれで悪くはないが、思い切って、本作によって「世界最高の興行収入を獲得した女性監督」の称号を手にした賈玲を起用する手があったかも？２０２１年７月に開催された東京２０２０五輪の記録映画の総合監督に河瀬直美監督が起用されたことと対比しても、中国にはそんな思い切った選択肢があったのでは・・・？

とは言っても、本作の脚本を書き、監督し、主演した賈玲は女優ではない上、脚本家でも監督でもなく、中国の漫才である“相声”の道を歩んできた１９８２年生まれの女芸人（？）。相声の舞台を踏み続ける中で舞台劇の発表を続け、中国版紅白歌合戦である「春節聯歓晩会（春晩）」に何度も出演する中で、中国を代表する若手喜劇役者の一人に成長したそうだ。そんな経歴を見ても、エリートの道を歩んできた（？）河瀬直美監督とは大違いだが、これまでいくつかのドラマや映画小品を発表する中で、第１回の小品として発表したコント「你好, 李煥英」の映画化を決定。亡き母への思いを元にした心温まる物語は、中国１３億人民の心を鷲掴みにしたらしい。

近時の中国は、『戦狼２　ウルフ・オブ・ウォー２』（１７年）（『シネマ４１』１３６頁）（『シネマ４４』４３頁）に続いて、『長津湖』（２１年）という戦争映画、国威発揚映画を大ヒットさせ、興行収入１，０００億円を突破させている。もちろん、それは歴代トップだが、何と本作は興行収入第２位の９４０億円となったため、賈玲は「世界最高の興行収入を獲得した女性監督」の称号を手にすることに。そんな中国映画がやっと日本で、そして大阪で公開。こりゃ必見！

■□■タイムスリップは２００１年から１９８１年へ！■□■

「タイムスリップもの」はある意味でバカバカしいが、『時をかける少女』（８３年）や『サマータイムマシン・ブルース』（０５年）のような面白いものもある。しかして、１９８２年生まれの賈玲監督が、亡き母を思い出しながら作り出した「タイムスリップもの」たる本作の設定は、賈暁玲（ジア・シャオリン）（賈玲（ジア・リン））が２００１年から１９８１年にタイムスリップするものだが、それは一体なぜ？ちなみに、賈玲監督は２００１年に中央戯劇学院の相声科に合格したものの、合格一か月後に母親は死去したらしいが・・・。

本作冒頭、元気と明るさだけが頼りで、何をするにもまるでダメで母に苦労ばかりを掛けてきた娘、賈暁玲から、一流大学に合格したとの報告を聞いた母親、李煥英（リ・ホワンイン）（劉佳（リウ・ジア））は大喜び。レストランで開いた合格パーティーには大勢の友人、知人が出席したが、何とその合格通知書は偽造だったから、アレレ・・・

もっとも、中国には「母親にとって娘とは、温かくや柔らかな中綿入りの上着のような存在」と言う、娘に対する誉め言葉があるらしい。母の李煥英はしょっちゅう学校から呼

び出されていたが、彼女は娘が健康に育てば十分と考える、どこにでもいる普通の優しい母だった。さすがに今回は賈暁玲も母親からの大目玉を覚悟したが、意外にも母親は今回も娘を責めず、むしろ慰めてくれた。そして、二人は自転車を二人乗りして家へ急いだが、突然の交通事故によって全く意識のなくなった母親の生死は？賈暁玲は自分を責め、泣き続けたが、どうもそのまま眠ってしまったらしい。しかして、目を覚ますと、賈暁玲は一体どこに？そして、その姿形は？時は１９８１年、舞台は大きな工場の中だ。そこで賈暁玲を迎えた人物たちは？

■□■１９８１年の中国は工場、テレビ、バレーボール！■□■

１９４５年の敗戦からわずか１９年後、戦後復興から高度経済成長へ軌道を載せた日本は、１９６４年の東京五輪を迎えた。そして、それまでは町の電器屋にある１台のテレビでプロレス中継を見ていた日本国民も、１９６３年の「天皇陛下ご成婚」を契機に、家庭でのテレビ購入が始まったが、中国は？また、１９６４年の東京五輪では“東洋の魔女”たちの大活躍で女子バレーボールが盛り上がったが、中国は？さらに、吉永小百合主演の『キューポラのある街』（６２年）は、埼玉県川口市にある鋳物工場の中で、貧しくとも前向きに明るく生きる女子高生の姿が日本の映画ファンの心を鷲掴みにしたが、中国の工場は？１９６７年に始まった毛沢東の文化大革命が終焉したのは、１９７７年。北京電影学院の再開は１９７８年。そして、鄧小平による改革開放政策が始まったのも１９７８年だが、賈玲監督が設定した１９８１年の中国は？

空から地上に落ちてきた賈暁玲の下敷きになったのは、若い頃の母親、李煥英（張小斐（チャン・シャオフェイ））。李煥英が賈暁玲を従姉妹だと“勘違い”したことによって、ストーリーはややこしい設定を省略し一気に進み始めるから、賈玲の脚本は素晴らしい。現実の賈暁玲は自転車事故で母親、李煥英を失うまで一度も親孝行したことがなかったが、若かりし母、李煥英に再会できた今なら、あれもこれも親孝行を！そうすれば、きっと李煥英は幸せになれるはずだ！そこから始まる賈暁玲の親孝行まっしぐらの道は、まずはテレビの購入での大奮闘。続いて、職場のバレーボール大会での大奮闘だ。ライバルを押しのけ、蹴散らす賈暁玲の知恵と行動力に注目だが、それを何とも面白い物語に仕上げているのは、労働者であることが最も栄誉であり、青い作業着と自転車がシンボルだったという１９８０年代の中国の時代状況だ。

三つ編みの髪に白いブラウス、そしてひざ丈のタイトスカートという李煥英の姿は何の飾り気もないが、『初恋のきた道』（９９年）（『シネマ３』６２頁）、（『シネマ５』１９４頁）のチャン・ツィイーのおさげ髪と赤い服が何とも言えず美しかったのと同じように美しい。本作にみる、若き日の母親、李煥英の美しい姿にも注目！

■□■結婚はどちらの男と？母親の選択は如何に？■□■

年頃の娘がいい男との結婚に憧れるのは、洋の東西、時代を問わず共通。すると、タイムスリップした賈暁玲の目から見れば、多少出来が悪くても、工場長の息子で将来の地位

と富が約束されている男、沈光林（シェン・グアンリン）（沈騰（シェン・トン））がベスト。そう考えていろいろと応援してきたが、よく考えてみると、もしこの２人が本当に結婚すれば、自分は生まれないことになってしまう。そんな“自己矛盾”に気づいたが、何の何の！現実に目にしてきた母親、李煥英の苦労を考えれば賈暁玲が生まれなくても、沈光林と結婚するのが李煥英の一番の幸せ。そう考える賈暁玲の奮闘は続いたが、さて、若き日の李煥英自身の恋愛事情は？そして、結婚話の展開は？工場長の息子沈光林と、ぐうたらな粗忽者、冷特（ロン・ター）（陳赫（チェン・フー））の二人が絡む結婚話での、賈暁玲の奮闘に注目！

ちなみに、ジャ・ジャンクー監督の『青の稲妻』（０２年）（『シネマ５』３４３頁）では、改革開放政策がドンドン進み、若者の感覚も激変していく２００１年の中国・山西省の地方都市大同を舞台に揺れ動く１９歳の男女を主人公として描き、また、『帰れない二人』（１８年）（『シネマ４５』２７３頁）では、今や百戦錬磨の女渡世人に成長した（？）女主人公を描いている。高倉健や鶴田浩二のヤクザ映画を考えるまでもなく、ヤクザやチンピラ、そして渡世人は映画の主人公に最適だ。しかして、１９８１年当時の本作の冷特は“古惑仔”。これは「チンピラ」「暴漢」という意味だが、香港のベストセラー漫画『古惑仔』を映画化した『欲望の街・古惑仔』シリーズ（９５～９７年）との関連を含めて、いろいろと深い意味があるので、それは一人ひとりしっかり勉強してもらいたい。

■□■涙、涙、また涙！母娘の語らいは如何に？■□■

本作に主演した賈玲は、導入部での２００１年当時の賈暁玲と、本格的にストーリーが展開する１９８１年当時の賈暁玲の両役を演じている。しかし、本物の賈玲は１９８２年生まれの４０歳近いおばさんだから、本来そんな娘役は難しいはずだ。しかし、性来の童顔（？）とお笑い芸人として長年鍛えてきた経歴のおかげで、その演技力は抜群。１９８１年当時の若き日の母親李煥英を相手とする従姉妹役に徹して、諸葛孔明並みの知力（？）と、関羽や張飛並みのたくましい行動力（？）を発揮するので、それに注目！

本作の面白さの大半は中盤のメインストーリーだが、意外にも李煥英が沈光林ではなく、現実に賈暁玲の父親となったジア・ウェンティンとの結婚を選択し、彼との結婚証明書を見せてくると、ストーリー展開の意外性と、そこから生まれてくる感動はクライマックスに！この選択は決して賈暁玲が望んだものではなかったが、そこにみる母親の幸せそうな姿を見ると、賈暁玲はいよいよ２００１年に戻る時が来たと考えたのは仕方ない。しかして、そこで交わされる母娘の対話とは？また、そこで賈暁玲が気づいたある真実とは･･･？そこで、涙、涙、また涙となることは必至だ。そんな自分を再発見できれば、新たな人生観が生まれるかも？

２０２２（令和４）年１月１３日記